
ブラジル・シンドローム

ますたあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラジル・シンドローム

【Nコード】

N6697J

【作者名】

ますたあ

【あらすじ】

あの日からあたしの人生が変わった。

失ったものは戻って来ないと分かってる。

分かってる……。

分かってるけど……。

でも……やっぱり、あたしキョンのこと……。

ハルヒに起こった悲しい別れ、時間と共にハルヒは……。

1話 別れ（前書き）

このお話は、09年5月22日～6月1日でmixiの日記にて掲載し、

涼宮ハルヒのSSコミュにて2009年07月22日～2009年08月08日で投稿したものです。

すぐにお読みになりたい方は、そちらでお読み下さい^^
では、どうぞー

1話 別れ

あたしは窓から差し込んでいる朝日によって目を覚ました。
のっそりと体を起こし思いつきり伸びをした。

予定より早く目が覚めている。

あの日からあたしはいつも浅い眠りで、ちょっとした音や光で目が覚めるようになった。

そう……体が……あたしが……深い眠りを受け付けなくなったの。

よく分からなかった。

SOS団の活動があたしにとって全てになりつつあった。

でも、それはいつも隣にあんたがいてくれたからと気づいたのは
そう時間はかからなかった。

あたしにとつてあんたはあたしに面白いことを持って来てくれる
サントさんみたいなもんね。

でも…それがあたしにとつて防御壁だったなんて気づいたのは
あんたを失ってからだった。

みくるちゃんや有希に目がいくあんたがなぜだか分からないけど
イラついた。

こう、胸の奥から亀裂がはいるようにね。

それが何なのかもあたしはあえて気づかないフリをしていた。

あんたには恋愛は精神病の一種よ。なんて言ってたからね。

そう言った手前、あんたに気持ちなんて伝えれる訳ない。

あたしは団長であんたは平団員。

恋愛関係になるなんてありえないことよ。

そんないくつも連なった防御壁は結果的にあたしの苦しみを狭めるものにしかなかった。
。

そして、あたしは変な夢をみた。

以前にも同じ夢をみたことがあったけど、今回も同じ。

気がついたら制服で学校にいて、隣にあんたが寝ていた。

その時、あたしは以前感じた恐怖に襲われながら、心のどかで
安心をしていた。

抜け出したくない。

また、あんたはあたしのことを見てくれなくなる。

あたしは……

あたしは……

そんな素直の気持ちも出せなかった。

プライドなんてなくなってしまうばいいのに。

戻りたくない！

どうせ、これは夢なんだから

あたしの好きにさせてよ！

戻りたがるあんたをあたしは罵倒した。

そう、あんたはあたしのことも思っていないのね……。

ならいい……

あんたなんか……

あんたなんか……！

いなくなればいいのよ……！

.....

.....

...

気がついたら、あたしはベッドにいた。
やっぱり、夢か。
夢でもあんたにんなことを言って会っことをためらった。
でも、行かないと。

あの日以上にあたしは今日ほど学校を休みたいと思っことはな
かった。

しかし、あたしはこの日登校しても問題はなかった。

だって、あんたは休みだっただから。

そして……

あんたが亡くなったことをあたしは古泉くんから聞くことになった。

2話 現実

ウソ……

てつきり、古泉君が最近退屈しているあたしのために用意してくれたドッキリだと思っていた。

でも、その表情からはいつもの笑顔はなかった。

『信じられないのは分かります。しかし、昨日彼は突然発作を起こし、僕の知り合いの病院に担ぎ込まれて来たのです。』

ウソ……昨日、元気だったじゃない……

『あまりの突然なことに僕も涼宮さんに連絡することを忘れていました。申し訳ありません…』

それに……

『そして、先ほど医師から彼が息を引き取ったとの連絡がありました。』

あたし……

『僕のみならず、ご家族の方しか彼とは面会はされていないようです。』

アタシ……

『薄れいく意識なのに、彼は…涼宮さんのことを呼ばれて…いた…よう…です…』

イヤだ……

あたしはその場に倒れこんだ。

幸い古泉君が支えてくれて何とかケガをせずに済んだらしいけど、あたしにとってそんなことどうでもよかった。

キヨンが死んだ……？

ウソ……？

そんな質問をあたしは自分の中で何度もした。

きつと、この場に来ていなかったらその質問の答えは永遠に出なかったと思う。

みくるちゃんは今すぐに泣いてしまいそうだけど、泣いちゃダメって言い聞かせているのか我慢している。

みくるちゃんにこんな顔させて、あんた良いと思ってるの？

有希もいつも大人しいけど、この日はもっと大人しかった。

それに、何て言うか悲しそう……

そっか、あんたって有希のこと分かったもんね。。

古泉君もあれから動けないあたしやご家族の方に代わって色々としてくれたみたい。

顔から疲れが滲み出ているけど、

『僕に出来る……最後の……役目……ですから……』

と言つて、目に涙を浮かべていた。

あんた、良い友人持ったじゃない……。

『ハルにゃん……』

妹ちゃんの寂しそうな顔。

そんな顔しないで、大丈夫、大丈夫だから……。

あんたも妹ちゃんにこんな顔させて、良いと思ってるの!?

『あなたが涼宮さんね、お話は息子から聞いております』

あんたはどんな話をお母さんにしたの?

とつちめてやらない……と、

『皆さんに送ってもらえて……あいつも幸せだと思います』
初めてお父さんにお会いした。

あなたってお父さん似なのね……小さい頃の写真今度……今度……

棺に入っているあなたを見て、あたしは確信した。

「キヨ、キヨン……」

そこにいたのはいつも前の席で寝ているキヨンの寝顔そのものだった。

何よ……寝ているだけじゃない！

『す、涼宮さん……』

みくるちゃん、こいつ寝ているだけよ。

任せて！あたしはいつも授業中に寝ているこいつを起こしているんだから！

『心肺停止、脳の活動も停止、一般的にこれを死亡と言つ。信じられないのは……分かる』

何言ってるのよ。。

ほら、おきなさいよ！

いつまで、寝てるのよ！！

今日、学校来なかったから少しは心配したんだから！！

『ハルにゃん……キョンくんは……キョンくんは……』
妹ちゃん、いつもどうやってキョンを起こしてるの？
ほら、一緒にキョンを起こしましょう！

『やめろ！涼宮！！』

『やめて下さい！涼宮さん！！彼は！彼はもう死んでるんです！！
！現実を……受けてとめて下さい……』

岡部と古泉くんにあたしは羽交い絞めされた。
ちよ、ちよっと！離しなさいよ！！

このまま寝てたらキョンが……キョンが……。

分かってた……でも、あんなにキョンが幸せそうな顔で寝ている
なんて……。

あんた退屈な日常に飽き飽きしてたんじゃないの？

自分だけ幸せな日常を送ってたなんて許せないわ。

あんたは……あんたは……あたしに面白いことを持って来てくれ
るサンタさんじゃなかったの……。

あたしがあんたの死を受け入れるようになったのは、前の席が空
席になった学校だった。

この席であんたは窓に背をむけながら、あたしの話を聞いてたわ
ね。

あんたがいなくなっただせいで授業中寝てたり、ボーっと空を見て

いたら教師に注意されるのよ。

ホント、あんたって……。

SOS団の活動は引き続き行っているわ。

あんたは名誉平団員1号として、永久に団員よ！

喜びなさい！！

みくるちゃん新しいお茶を淹れてくれるようになったし、新しいコスも用意したんだから。

今度は有希も着るのよ。

見たいでしょ？

古泉君も新しいボードゲーム持って来て、強くなってるんだから！

だから……早く……戻って来……な……さいよ……。

ねえ……戻って来て……ねえ……ってば……。

3話 出会い

そんなあたしも大学生になったわ。

大学なんて行きたくなかったけど、就職するのもイマイチ、ピンとこなかった。

SOS団のみんなとはたまに連絡を取ってるの。

みくるちゃんも海外へ留学に行つて、時々メールでやりとりするわ。

有希も東京の大学へ進学したみたい。

古泉くんは大学は違うけど、会うことはなくなった。

あたしはと言うと……。

「なあ、聞いているのか？」

「別れましょ」

「はあ、何言つてんだ……？おつ、おい……」

「あんた退屈」

寂しさを紛らわすため何人かと付き合つてみたけど、全然ダメ。

どいつもこいつも、発情期の雄犬みたいにやることしか考えてない陳腐。

もう、口説き文句も決まつて逆に笑えちゃうわ。

いいの、自分が周りにどう思われようと。

こうしていれば、またその内……。

って、あたしまだこんなことを考えてるんだろう？

お墓参りだつて言ってるのに。

いつまでも泣いてちゃダメって、そこで誓ったのに。

あんたが天国から戻つて来なくなるくらい、すっごい美人になつてやるんだから！

今のあたしを見て、あんたはどう思うのかしら？

また、呆れ顔見せてくれる？

あたしダメだよな？

こんなダメな女……あんたしかそばにいれくないよ……。

今日、遊ぶのは実はあんたに一番よく似てるの。

あたしだって誰でも良いってことじゃないわ。

その……あんたに似たようなやつと付き合うことにしてる。

でも、全然ダメ！

あんたも越せないよう男じゃまだまだね。

今回の相手もどうせそうなんでしょうけどね。

そいつ出会ったのも、変な縁。

あたしが学校まで電車を通うんだけど、よくあうのよ……痴漢。
その日も例のごとくいたわ。

分かる？知らないおっさんに足やらお尻を触られる女の子の気持ち？

あたしに触ったことを未来永劫後悔すると良いわ。

まさに駅着こうとした来た時、あたしはそいつの腕を掴んでやる
うとした……。

『おい、何やってる！』

あたしの真後ろで聞こえたその声は電車内に響いた。

電車内がざわめく

『あんた、その子に触ってただろ？』

あたしは振り返る。

そこにいたのはいかにも真面目そうなサラリーマンに、髭をたく
わえてメガネをかけて髪を立てた、あたしよりちょっと年上の男。

「し、知らない！何を言ってるんだ……！」

しらばつくれるサラリーマン

『俺は後ろで見てたんだ、とりあえず次の駅で降りてもらうか』

ふ〜ん、最近は草食男子ばかりで、肉食ぶった男もいるのに、まだいたんだこんな男。

『あんたも一緒に降りてくれよ』

痴漢を捕まえた男とここで初めて目があつた。

さっきは、突然のことによく覚えてなかったけど、よく見ると…。

…。

あたしはもう、会えないあんたを重ねたわ。

似て……る……かも……雰囲気……よく分からない……。

あたしは彼に言われた通り次の駅で降りた。

結局、あたしの証言と他の人の証言で犯人はやはりこのサラリーマンだった。

ホント、こういう外見だけ真面目に見せて……世も末よね。

しばらく、話を聞きたいと拘束され、色々面倒なことに巻き込まれた。

『大丈夫か？』

やっと、解放され気分的に学校へ行く気にもなれなかったあたしはこのまま帰ろうとした。

そんな時、あの痴漢を捕まえてくれた男が声をかけてくれた。

「ええ、大丈夫、どうせ捕まえようと思ってたところだったし」

『ははは、そうか。それは悪いことをしたな』

その笑い方が少し癪に触って思わずムツとしてしまった。

『これからは女性専用車両に乗れよ』

そう言つて彼は改札口に向かった。

あたしはその潔さに驚いた。

こういうのって、「ありがとうございます。もしよかつたらお礼がしたいので連絡先を教えて下さい」なんてやりとりがあるもの。なのに、何でそんな当たり前のことをしたみたいにいれるの？

「ねえ！」

あたしは思わず彼を呼び止めてしまった。

彼は振り返り、無言であたしに用件を促してきた。

「お礼……させてよ」

「えっ？ いや、別に良い……」

本当ならそれでおしまいにしてもよかった。

でも、なぜか分らない。

彼とは以前どこかで会った気がする。

そんな気持ちがどこから来るのか分らない。

だからあたしは知りたくなった。

どうせ、つまらない人生なら、この不思議を追っかけてくなった。

「今度の日曜日、あんた暇？」

あたしは彼の言葉なんか聞いていなかった。

「えっ……？ 暇は暇だが……」

「じゃあ、日曜日10時、北口ね」

あたしは矢継ぎ早にそう告げると彼の横を通って改札を出た。

改札の向こうであたしは固まっている彼にこう言った。

「来ないと、死刑だからっ！」

どうしてこの言葉が出たかは分らない。

ふと、頭に過ぎったから口にしただけ、

彼の反応が見たかったのかな？

あたしと同じように彼は笑ってくれた。

日を待ち遠しく思うのはいつぶりがしら？

ごめんね……キョソ。

4話 デート

リビングで朝食を済ませ、あたしは着替えた。

「日曜日なのに早いね」とお母さんに言われ、あたしが「デートだから」と答えると、お母さんは渋い顔になっていた。

別にあたしだってしたくない。

何なら今回が最後にしたって良い。

どうせ、あたしを退屈にさせないのってあんたしかいない。

そう、あたしは確信を持ちたいの。

それだけのためにあたしは遊ぶの。

だからやきもち妬いちゃダメよ？

あたしは写真立てに写っているあんたに声をかけた。

（古泉君！写真撮って！）

（ちょっと、待て！お前……）

あんたにお姫様だっこをしてもらった写真。

嫌なそうな顔をしているあんたとは対照的なあたしの笑顔。

この頃のあたしと今のあたし変わった？

少しはキレイになったかしら？

あんたはそういうこと平気で言うからいつも驚かされたわ。

それにしても、この嫌そうな顔。

ホント、どうしてあんたなんか惚れたのかしら？

まあ……そんなあんたが今も一番のままなのが理由なのね。

じゃあ、いつてくるわ。

あたしは写真立てを机に置くと部屋を出た。

待ち合わせ場所には、すでに彼がいた。
グレーのジャケットにドクロのシルバーリング、髪型も少し変えて来てるわね。

ふーん、気合も入れてきたみたいね。

彼があたしを見つけるなり手をやんわりとこちらに向けてあげていた。

あたしは別に急ぐこともなく彼の方へ歩いた。

まあ、あんたとは違って早く来るのは関心だわ。

『よっ』

「来たのね。てつきり来ないかと思ったわ」

あたしは遠慮せず心の中の思いを言った。

別に取り繕う気はない。

嫌いな嫌いになればいい。

あたしは男の前で媚びへつらったりする気はない。

猫？被るわけじゃないでしょ。

『まあ、お礼をしてくれるんだからな』

……やっぱり、変ね。

あたしの言ったことにムツとすることもなく、少し呆れた顔をしながらもどこか嬉しそうな顔。

余裕すら覗える

「そうね、あたしより遅かったらその約束も無下にしようと思ってたところよ」

『そうかい。ところで……』

そう言うとき彼はあたしの前髪を触った。

『髪切ったせいかこないだ会ったときより幼くなったな』

えっ……気づいたの……？

あたしは思い切って前髪を切ってみた。

気づいて欲しかったと言うより気づくかなという気持ちの方が強かった。

見事、彼はそれに気づいた。

「幼くなつてないわよ！」

あたしは勢い良く彼の手を振り払った。

『そうかい。でも、俺はこないだ会った時よりも今の方が好きだ。お前らしいよ』

そう言つて、また余裕の笑みを見せた。

ムカつく……あたしはキレイになりたいの。

だから、今日のピンクのスカートにお花の髪飾りなんか……。

『似合つてるぞ、俺はかわいい方が好きだ』

「なっ……」

いきなりの言葉にあたしは言葉を詰まらせた。

「あんたの好みなんか聞いてないわよ！」

あたしは自分の気持ちを押し殺した。

嬉しい……こんなこと思つたのいつぶりだろ……。

この気持ち……。

でも、ダメ……言えない……。

言わない……。

だって……

だって……あたしには……

キヨン……

『おい、大丈夫か？』

彼はあたしの肩をゆすっていた。

「平気よ」

あたしはまた気持ちを殺した。

言う必要……ないもん。

『そうか……で、どんなお礼をしてくれるんだ？』

何でそんな自分のことのようにホッとするの？

何よ……ますます重ねてしまうじゃない……。

4話 デート（後書き）

キヨンとハルヒの写真はmixiへの投稿時はUPしました。
しかし、こちらでは載せれないのでイメージを頑張らせて下さい
（笑）

5話 質問

デートっていつもは相手が勝手に決めたところに行くんだけど今日はあたしが行きたいところに行くことになった。

そうなるかなと思って予め考えて来てた。

あたしがよく行ってた喫茶店に入った。

ここに来るのも久しぶりね。

入るなり中を見渡すと見知った顔がいた。

「いらっしやいませ、お久しぶりですね」

いつもの席に着くとすぐにお冷とおしほりを持って来てくれたのは喜緑さんだった。

「そうね、卒業して以来来てないもんね」

あたしは喜緑さんに疑問を投げかけてみた。

「まだ、誰かここに来る？」

それに対しての返答は、

「私もつい最近またお手伝いをし始めましたので、その間は誰も」
そう、古泉君も忙しいのね。

「あたしアップルティー。あんたは？」

『ホットコーヒーで』

あたしたちの注文を伝票に記した喜緑さんはマスターに注文を言っていた。

「あんた、メニュー見なくてよかったの？」

『ああ……まあ喫茶店にきたらいつもホットコーヒーだからな』
ふん、そう。

そういえば、あんたもホットコーヒーよく飲んだわね。

あの時、あんたがした話覚えてるわよ。

有希が宇宙人でみくるちゃんが未来人、古泉君が超能力者だったわね。

何を話すかと思ったら、そんな話

あんたはもう少ししまともだと思ってんだけど、とんだ茶番だったわ。

でも、不思議と悪くないと思った。

そうあつたら、面白いとさえ思ったわ。

じゃあ、あんたは異世界人？なんてことも考えたわ。

そっちから戻ってきたら異世界人に認定してあげるわ！

そんなことを考えていると注文の品を喜緑さんが運んで来た。

結局、あたしたちは注文をしてから一言もやりとりをしていなかった。

何よ、楽しくないって言うの？

あたしは砂糖とミルクを入れている彼を一瞥しながらアップルパイを飲んだ。

ほのかなリンゴの香りと甘さが不思議と体をリラックスさせてくれた。

『それで？』

飲む前の作業を終えた彼は飲んだ後にあたしに聞いてきた。

『今日のお礼はこの代金か？』

「まさか、ここは割り勘よ」

嫌な顔を期待したけど、彼はまたあたしの期待を裏切った。

『そうか、よかった』

「何よ？」

あたしはつまらない気持ちを声に乗せて投げ返した。

『いや、ここの奢りだけなら残念だと思ってな』

「痴漢を捕まえたのが？」

『そうだ』と言って、口元にやんわりとした笑みを作ると、

『どうせなら、もう少し一緒にいたいと思ってな』

その笑みはあたしの心を揺さぶった。

どうしよう……今、あたしどんな顔をしているんだろう……。

あたしはふんと鼻を鳴らし、視線をそらしてアッフルティーに口をつけた。

さっき飲んだときより甘く感じたのはどうしてだろう？

あたしは目だけ彼に向けると、彼の口元はにやりと意地悪な笑みになっていた。

『まあ、お前のお尻もこのコーヒーだけじゃ釣り合わないだろ？』
「なっ……あ、当たり前でしょ！？誰の触ったと思ってるの！！」

あたしは今にも立ち上がりそうな勢いで怒った。

と言うより恥ずかしかった。

彼は『そうだな』と笑うとコーヒーに口をつけていた。

ム力つく……でも、久しぶりにこんなに叫んだ気がする。

気がつけばあたしはいつものあたし……あの頃のあたしに戻った気がした。

SOS団の部室でいつも繰り広げたあなたのやりとり。

最後には必ず一緒にいたあなた。

そんなあなたにあたしは遠慮なんかしなかった。

する必要がなかったの。

だって、全部あなたは受け入れてくれた。

悔しいけど、あなたのモテる理由が分かる気がしたわ。

知ってる？あなた人気あったのよ？

まあ、『あたしという彼女』がいたからみんな声を掛けなかったらしいけどね。

彼女か。。

あなたはどう思ってたの？

結局、そのところ聞いてないわね。

でも、もう聞けないか。

……って、あたしまたあなたのこと……。

「ねえ……」

あたしは彼にあんたにいつか聞いてみたかった質問をした。

「あんた。宇宙人、いると思う？」

6話 変化

急に何を聞き出すのかと思ったのか彼は、飲もうとして手に掛けたコーヒークップを持ったまま固まっていた。

「宇宙人よ。いると思う？」

あたしはもう一度問いかけて見た。

この質問をすると答えは2つに分かれるけど、本当の答えは1つしかない。

何言ってるんだこいつは？本気でいると思ってるのか？

こんな考えが腹にある間はどっちでも答えは一緒。

中には真剣あたしに病院へ行くことを勧めてきたやつもいるわね。

『そうだな……』

彼はコーヒークップに掛けていた手で自分のあごひげを触るとゆつくりと口を開いた。

『いるんじゃないか？』

どこか他人行儀な回答

「じゃあ、未来人は？」

『いてもおかしくないだろう』

意外にもこの質問には表情は崩さなかった。

別に理由を語ろうともしない。

まあ、聞きたくないし、

「超能力者なら？」

『それなら配り歩くほどいるだろう』

ここまでならあたしは知ってるあいつと同じ考え。

あたしはあの七夕の日に学校に忍び込んで一緒に織姫と彦星に宛てたメッセージを書いてくれたジョン・スミスを思い出した。

あれが、きっかけで北高に入ったんだっただけ。

担任はやたらと上の私立を薦めて来たけど、あたしは面白いことをしたかった。

勉強は必要最低限のことよ。

どうしてあんたはそれも出来なかったのか不思議だったけど。それについて考察していれば、もう少し高校生活も楽しかったかもね。

あたしはもう1つの質問を彼に投げかけた。

「異世界人は？」

彼は視線だけを上にあげ、こっちを見た時にずれたメガネをあげてこう言った。

『案外、近くにいるんじゃないのか？』

「ふん」

あたしはいかにも興味がなさそうな返事をした。

しかし、実際は考え事をしていたから返事に気を使う余裕がなかっただけだった。

今までに返って来たことがない答えだった。

多くを語らない癖に、なぜかその言葉に納得させられる。

何か理由でもつけようなら「あんたの意見なんか誰も聞いてない」って言って黙らせる予定だったのに、

そついうところ、あんたとは違うわね。

その後も曜日によって感じるイメージや数字など、まるであんとの会話を思い出すように話をした

でも、彼が返す言葉はあんたに似ているところもあり、違うところもある。

しかし、あたしはあんたと同じものを彼に感じていた。

ダメ……違うの……あたし

彼はキヨンじゃない……

じゃあ、キョンより上かって？

分からない。。

でも……もう少し……一緒にいても……いいと思う……。

そして……あたしは『彼』に『あんた』がもし生きていたらと重ねるようになっていった。

7話 本音（前書き）

ハルヒの心境を表現するために、変な改行を行っています。

PCの方はまだ読めるかとは思いますが、携帯でご覧の方には申し訳ありません。

この話以降、この改行が多く出てくるかと思いますが、御辛抱の程、お願い致します。

7話 本音

あれから、あたしたちは付き合うことにした。

人生初の告白をしたけど「付き合つてよ」と言っただけ。

まあ、彼も『ああ』とこんな感じであっさり決まった。

もしかしたら、付き合つてないのかもね。

それでも、あたしにとってそんな肩書きあってもなくてもどうでもよかった。

もし……あんたがこれを聞いたらどんな顔をしてくれた？

怒った？

悲しんだ？

それとも、何とも思わなかった？

今の、あたしあんたに言われたとおり健全な女の子らしく恋に励んでるわよ？

ねえ、早くこないと彼とキスしちゃうわよ？

いいの？今日帰って来ないわよ？

止めるなら今の内だからね……。

キヨンの意気地なし……。

あんたは何度話しかけても表情を変えることはなかった。

写真に写る、あの時のあたしたち。

こんなことになるなら……あの時……夢であんなこと言わなきゃよかった……。

素直に好きって……離れたくないって……言えばよかった……。

それで、バイバイした方がこうはならなかったよね……。

泣いたところであんたは帰って来ない。

だから、強くならなきゃって思った。

変わらなきゃって思って、あんたの言われたとおりに色んな男と付き合ったよ？

なのに……どうして、あんたはあたしから離れてくれないの？

ねえ！いるんでしょ！？

出てきなさい！

あたしの声はむなく部屋に響くだけで、あんたからの返事はなかった。

キョン……あんた一体どうしたいの……。

教えて……あたし……もう分かんないよ……。

そんな時、彼から電話がかかってきた。

『どうした？体調、悪いのか？』

そうだ……今日彼とデートだったんだ。

あたしは机に置いてある時計で時間を確認した。
待ち合わせの時間を10分過ぎていた。

「ごめん……今から行くわ」

何言ってるんだろ？

ホントはそんな気分じゃないのに……。

『大丈夫なのか？ムリしなくてもいいんだぞ？』

「ううん……会いたいから」

そんなことない……今、会ったらあたし……。

『そうか……なら、待ってるから、気をつけて来いよ』

「うん、ありがとう」

今からでも遅くない。

ただ、体調が悪いからとか、

会いたくないっていつもみたいに言えばいいじゃない……。
なのに、どうして？

どうして、彼には本当のこと言えないの？

違う……

ホントは……

ホントの気持ちは……

彼キョウに会いたい……

あたしは気持ちの整理もつかないまま家を飛び出した。

空はあたしの気持ちを表すように澱んでいたことに気づくのは、
自分の頬が濡れてからだだった。

8話 炉心溶融1

雨か……。

昨夜は、雨は降らないと言っていたけど、今日の天気予報は観ていない。

雲の動きが早くなったのかな？

あたしはあることに気が付いた。

確か折り畳み傘が入っていたはず、カバンを探すとそれは入っていた。

あたしは自分の日頃の準備に感謝しつつ、差すことにした。

その時、あたしはあんと一緒に帰った時の風景を思い出した。

あの時は2人で傘差して帰ったわね。

実はあの時も折り畳み傘はカバンに入っていた。

ホントは職員室から借りてきた傘をあんに貸そうと思った。

でも、あんたの気持ちよさそうな寝顔にあたしはあんな行動をとってしまっていた

あの時、何しようと思ったか分かる？

教えないわよ！

バカ！

もうすぐ彼との待ち合わせ場所に着く。

雨のおかげでゆっくり歩くことができ、気持ちも自然と落ち着いてきた。

おかげで心の整理がついた。

もしかして、あんたが雷様様にでも頼んでくれたの？
まさか……古泉くんでもあるまいし、
あんたにそんな気の利いたこと出来ないよね。
それとも……やきもち妬きすぎて泣いてるのかしら？

バカね……あんたが一番よ。

今でもね。

待ち合わせ場所にいた彼にあたしは驚いた。

「あんた……傘は？」

「ああ、忘れた。待つてる間にそこのコンビニで買おうと思った
んだけどな……」

彼はあたしの差し出したハンカチで服をぬぐいながら、

「ハルヒの声が寂しそうだっただから、来た時に俺がいなかったら……
……って思ったら動けなくてな」

恥ずかしそうに笑う彼にあたしは何だか申し訳ない気持ちになった。

あたしのために、濡れても我慢して待っていてくれたんだ。

「バカ！そんな気遣って、風邪でも引いたらどうするの？そっちの
方が迷惑よ」

そう言うにあたしは溜息をついた。

「ホラ、しょうがないから入れてあげるわ。その代わり持ってよね」
あたしは折り畳み傘を彼に差し出した。

そんなに大きくない傘。

2人で入るなんて……。

『ありがとう』

そう言っ て彼は笑った。

その優しい笑顔は…… キョンよりもかっこいいと思ってしまった。

キョンが笑った顔があたしは好きだった。

全てを包んでしまう様な笑みは思わずこっちが照れてしまうほどで、あたしはまに見ることが出来なかった。

彼の笑みもそんな感じだった。

あたしにはちょうど良いサイズの傘。

でも、2人で入るには狭い。

必然的に何度も傘を持つ彼の左手に右手が触れる。

ヤダ…… あたし震えてる……。

『ん？どうした？寒いのか？』

どうしよう……。

寒くないと言えはいいの？

じゃあ、何で震えてるか聞かれるかもしれない……。

それに対してあたしはどう答えればいいのか？

手を伸ばせば、届く。

だって、あたし達は付き合ってるんだし……。

キョ
ン……

ごめんなさい……

あたしもう耐えれないよ……。

9話 ブラジル・シンドローム

あたしの気持ちは砂時計みたいにひっくり返った。

下へ流れる砂をもう誰も止めることは出来ない。

ついにあたしはあんたを……キョンを思い出として下へ流すことにした。

これが最後……あんたとの思い出を回想させて欲しい。

本当なら1日、1週間かかることを、あたしは彼と別れる駅までに終わらせることにした。

だから、時間を止めたくなった。

なぜかは分からない。

でも、そうしないと彼に悪いと思った。

あんたが……早く来ないからよ……。

あたしだって待つてるだけなんてイヤなんだから……

。

もうすぐ、あんたとの思い出が終わる……。

何度も見たあの夢……。

そっか……あんたはまだそこにいるのね……。

だから、あたしから抜け出せなかったんだ……。

でも、もう……いいよ……。

キョンも疲れたでしょう……。

ヤダ……泣きそう……。

こらえなくちゃ……彼が困っちゃう……。

ねえ、キヨン……。

どうして、迎えに来なかったの……？

あたし……待ってたんだから……。

もしかして、待ってるだけじゃダメなの……。

なら……あたしはこれでいいの……？

このまま、キヨンの思いを下に向けたまま、

逆さまにすることもなく、

ずっと、下へ下へ……。

それこそ、いつしか地球の裏側へ抜けるぐらい、

深い深いところへ、

キヨンを追いやっていいの??

どうなの? 涼宮ハルヒ……。

(ハ……ルヒ……?)

へっ……?

(ハル……ヒ……?)

……キヨン……?

(ハルヒ……)

あたしはここよー!

キヨン！どこにいるの！？

キヨン……！

『ハルヒ！』

あたしはまたここに戻された。

隣には……キヨンじゃなく彼がいた。

『大丈夫か？さっきから何度も呼んでたのに……やっぱり、今日は
ムリしてたんだな……』

違うの……。

『ごめん……気づいてやれなくて……』

違う……そうじゃなくて……あたし……

『今日はもう帰ろう。家まで送って行くから』

「違うの！」

ついに……あたしは再び砂時計をひっくり返した。

10話 炉心溶融2

「ハルヒ……？」

あたしが当然叫んだからか、彼は驚いた顔をしていた。

「ごめんなさい……あたし、やっぱりあんたとは付き合えない……」
もう、我慢することが出来ない。

「あたし……」

キヨンのことが好きなの！

そう言ってあたしはそのまま走り出した。

「おい！待て！ハルヒ……！」

あたしは彼の呼び止める声も無視をして、雨の中走った。

気がついた！

キヨンがない世界はやっぱり退屈だわ！

あの時と一緒に

どうしてこんな簡単なことに気付かなかったのかしら！

キヨンがないんだったら……、

キヨンがないんだったら……。

自分から向こうへいけばいいのよ！

あたしは今まで胸の奥で固まっていたものが一気に流れ出たような気がした。

あふれ出したエネルギーはもはやとり止めもなく流れ出す。

阻むものすらを巻き込んでいく。

走る足取りも軽くなる。

グングンスピードが上がる。

もうあたしを阻むものは誰もいない！

待ってなさい！

団長を迎えに来ないなんて団員としてあるまじき行為なんだから！
ら！

向こうでとっちめてやるんだから！！

駅のホームに着いた。

ちょうど、その時アナウンスが聞こえた。

……特急が来る。

ホームには電車を待つ人でいっぱいになっていた。

もう彼とも会えないのね。

そういえば、名前も聞いてないわね。

悪いことしたかも、

このままあたしがなくなったら、

彼はどうするんだろう？

怒る？

悲しむ？

それとも、何とも思わない？

あんたなら良い子見つかるわよ。

だって、あんたはキヨンよりも気が利いて、

キヨンと同じくらい優しい。

ホントはもっともつと良いところがあるんだろうけど、ごめんね。

あたしにとってあんたは……。

最後の彼氏……

そして、あたしに面白いことを持って来てくれた季節外れのサン
タさん。

電車が来た……。

スピードは緩めることはない……。

あんたのどこまで遠いと思ってたけど……、

もう目の前に……。

（ハルヒ……）

キヨン…… やつと迎えに来たの……？

（ああ…… 悪かったな）

言い訳はそっちで聞いてあげるわ。

だから、早く手を…… 繋ぎましょう……。

あたしそっちに初めて行くんだから、案内しなさいよ……。

（分かってる…… さあ……）

あたしはキヨンに誘われるように人の波を掻き分け、点字ブロッ
クを越え……。

もう、この世界ともバイバイしないと……。

キヨン…… 痛くないように今すぐあたしを抱きしめて……。

そのまま、ホームへ飛び込んだ

電車が急ブレーキをかける音と甲高い悲鳴があたしがこの世界で最後に耳にした音だった。

11話 冷却

あれ……温かい……。

ホントにキヨンが抱きしめてくれてるの……？

キヨンのにおいもする……。

キヨン……来たわよ……。

こっちから来てやったわ……！

驚いた？

あたしを誰だと思ってるの？

SOS団団長涼宮ハルヒよ！

これぐらい当然よ！

さあ、いいわね！

まずは、ここを案内しなさい！

ほら、何いつまで抱きしめてるのよ？

そんなに会いたかったら、あんたから来たらよかったのよ！

キヨン……

。

『ハルヒ!』

あたしは急に後ろから引つ張られる衝撃を感じた。

……。

『お前……何やってんだ!？』

あれ、ここは……？

あたしは目を開けた。

そこにはあたしが想像していたより割り現実的な世界が広がっていた。

「キョーン……」

やっと、会えた……。

耳が徐々に周りの音を拾い出した……。

（大丈夫か!？）

（身投げ？まだあんなに若いのに……）

（あの子がとつさに捕まえてくれたからよかったものの……）

えっ……？

「キヨン……ここって……天国じゃないの……？」

あたしはまだ状況が理解出来ていなかった。

キヨンは無言であたしを見つめたままボツリと呟いた。

『ここは、まだ天国じゃない』

えっ……？

じゃあ……あたし……。

『ああ、まだ生きてる』

あたしはすでに体に力が入らなかった。

でも、もつとあたしは力を入れることが出来なかった。

そっか……あたし……あんたのどこへ……行けなかったんだ……。

この後、あたしは駅員が呼んでくれた救急車で病院へ搬送された。偶然か分からないけど、そこはあんたが亡くなった病院だった。

幸いどこにも異常はなく、少し様子をみるため入院することになった。

お母さんは泣きながらあたしを叱ってくれた。

親父に殴られたのは本当何年ぶりかしら……。

親不孝の子どもでごめんなさい……。

彼はずつとそばにいてくれた。

彼は何も言わなかった。

ただ、ずつとそばに……そばにいてくれた。

あたしはずつと空ばかり眺めていた。

今のあたしを見てあんたはどう思っているんだろう？

きつと、怒ったんだろうな？

何で分かるのか？

だって、彼は怒っていたから……。

口には出さないけど分かるんだからしょうがないでしょ？

それより、何でもつと引つ張ってくれなかったの？

おかげでそっちに行きそびれたじゃないの！

アホキヨン！

こんなにあんたのこと思っているんだから出てきたらどうなのよ！？

その時、病室のドアをノックする音がした。

この音は……彼ね。

「どうぞー」

あたしはドアの方も見ることもなく返事をした。

「あんたも懲りずに毎日来るわね。もしかして、責任感じてるの？
何度も言うけど別れたことが原因で飛び込んだ訳じゃないの。あたしは……」

「キヨンに会いたかったんだろ？」

「そう、だからもう明日から来なくていいわよ」

「そうは行かない。せつかく会いに来てやった甲斐がないからな」

「しつこいわね！あんたの顔なんかみた……」

あたしは二の句を継げなかった。

そこにいたのは、メガネをかけ、髭を生やしたいつもの彼じゃなかった……。

最終話 キヨン

「……どうした？死んだ人が生き返ったような顔して？」

ウソ……だって……。

「まさか、お前……会えないからって勝手に俺を殺したんじゃないだろうな？」

あんた……だって棺に……。

「ん？そんなとこまで話が進んでるか……。やれやれ、古泉から連絡もらって帰国してよかったな」

あたしは思わず頬を抓った。

痛い……。

何度瞬きしても変わらない。

間違いなく……。

間違いなく……。

「キヨン……」

「そうだ、お前の目の前にいるのは間違いなく俺だ。生きてるぞ」
キヨンはそう言っであたしの手を握った。

温かい……。

でも、懐かしい感じがしない……。

グレーのジャケットにドクロのシルバーリング……。

あの、服装。。見覚えがある……。

「キヨン……いつ帰って来たの？」

「ああ、そんなことまで忘れたのか。さっきも言ったとおり古泉から連絡があつてな……」

キヨンの話ではついこないだ帰って来て、あたしはたちはデート中にケンカをして、それであたしがホームへ飛び込もうとしたみたい。

それをキヨンが掴んで助けてくれた

。

そう……そうよね……。

あたし……キヨンがアメリカに行ってる間、寂しくてそんな考えに囚われていたみたいね。

「やれやれ、勝手に死なされたら困るな」

「ホント……ごめん」

そう言つと、キヨンは穏やかな顔つきで優しく頭をポンポンと撫でてくれた。

違うような……でも、違わないわ。

服だつて、今日会つてゐるからよ。

うん、そうだわ。

頭打つたのかしら??

「心配させてすまなかつた……お前がそんなに弱いなんて思わなかつたよ。これからほこまめに連絡する」

「ホント……?」

「ああ、ホントだ」

「ウソ付いたら……分かつてるんでしょね?」

「何でもする」

あたしはキヨンにありとあらゆる要求を突きつけ、キヨンは苦笑いながら話を聞いてくれた。

「ところで、あんた向こうに言つて少しは英語できるようになつたの?」

「ああ……まあ日常会話ぐらいなら差し支えなく喋れるぞ」

「ふゝん、じゃあ今ここで話して見なさい」

「ここですか?」

「そう!早くしなさい!」

あたしはこのやりとりが何年もしていないような錯覚に陥つた。

変ね……まだキヨンは留学して1ヶ月も経っていないのに。

あたしは頭の中をひっかけまわして考えているキヨンを見つめながらそんなことを考えていた。

「よし、言つぞ」

キヨンはそう言つたり、片膝についてしゃがむとあたしの左手をとつた。

I thought that it mattered what I said or where I said it. Then I realized the only thing that matters is that you, though you make me happier than I ever thought I could be and if you let me I will spend the rest of my life trying to make you feel the same way.

そう言って優しく手の甲にキスをしたかと思うと……。

Haruhi, will you marry me?

「これ……」

あたしの薬指にはきれいなエンゲージリングが光輝いていた。

「英国の紳士はな、プロポーズの時片ひざをついて、”Will you marry me?”と聞きたい」
顔を真っ赤にしながらキヨンはそう言った。

「それで……返事は……？」

あたしは真っ赤になりながらキョンを近くまで呼び寄せて……。

キスをした。

「もちろん……良いに決まってるじゃないの！」

あたしが一番勇気を出した瞬間だと思った。

その時のキョンの顔は生涯忘れることはないだろう。

キョン……。

今度、向こうへ行くときは一緒に行つていいよね？
その時はしっかり抱きしめてなさいよ？

……なんてね！

もう、離さないわよ！

キヨン！大好き！！

く終わりく

最終話 キヨン（後書き）

ええ、いかがでしたでしょうかブラジル・シンドローム？
この作品なんです、実はある曲をモチーフにした曲SSと呼ばれるものなんです。

その曲とは、お気づきの方もいらしたとは思いますが…

『メルト』

と呼ばれるボカロの曲です。

歌詞

朝目が覚めて

真っ先に思い浮かぶ

君の事

思い切って前髪を切った

「どうしたの？」って聞かれたくて

ピンクのスカート お花の髪飾り

さして 出かけるの

今日の私は かわいいのよ！

メルト 溶けてしまいそう

好きだなんて 絶対にいえない

だけど

メルト 目も合わせられない

恋に恋なんてしないわ

わたし だって君の事が・・・好きなの

天気予報がウソをついた
土砂降りの雨が降る

カバンに入れたままの
オリタタミ傘 うれしくない
ためいきをついた
そんなとき

「しょうがないから入ってやる」なんて
隣にいる きみが笑う

恋に落ちる音がした

メルト 息がつまりそう

君に触れてる右手が

震える 高鳴る胸

はんぶんこの傘

手を伸ばせば届く距離

どうしよう・・・！

想いよ届け 君に

お願い 時間をとめて

泣きそうなの

でも嬉しくて

死んでしまうわ！

メルト 駅についてしまう・・・

もう会えない 近くて

遠いよ だから

メルト 手をつないで

歩きたい！

もうバイバイしなくちゃいけないの？

いますぐ わたしを

抱きしめて！

・・・なんてね

良ければ、ニコ動やYouTubeで『メルト』と検索していただければ、出るかと思えます^^

こんなかわいい歌詞をこんな風に書いてしまったんです。

これには理由がありまして、SS仲間とメルトを使った曲SSを書こうとなった時に、くにぞおさんとお話をしていて「この曲で悲しいのは書けないかな？」と言われたので、とりあえずプロットを思いつくまま作成し、挑戦してみました。

タイトルのブラジル・シンドロームですが、もし日本で原発事故が起こつたら、核の暴走による超加熱でブラジルまで穴があくつていう冗談（地球の構造上ありえないです）から来たものです。

mixi投稿時には、エンディングや場面ごとに解釈が人によっての違い、謎が多い作品になってしまい、作者なりの解釈はあるのですが、明かさないう方が面白い！と思うので、よければ自分なりの解釈をしていただけると幸いです^^

ちなみに、キョンがハルヒへのプロポーズで使った言葉の意味ですが、

「何を言うか、どこで言うかが大事だと思ってた。でも唯一の大事なものは君だと気づいたんだ。君といると最高に幸せになれるし、もし可能なら僕の人生をかけて君を同じように最高に幸せにしたい。ハルヒ、結婚してください。」

これはフレンズ？という作品から拝借したものです。

男の人が片ひざついて、"Will you marry me?"
"と言うのはデフォらしいです^^"

それでは、お後が宜しいようなのでこのくらいで。
ありがとうございました！

追記

執筆仲間である、UBOBさんがこの話を下敷きにした【ブラジル
よりの帰還】を投稿されましたので、合わせてご覧下さい。

<http://ncode.syosetu.com/n7071j/>

お気に入りユーザーにも登録させてもらってます^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6697j/>

ブラジル・シンドローム

2010年10月9日16時19分発行